



TADASHI HAYASHI

経済学部助教授。
1973年生まれ。三重県出身。京都大学博士（経済学）。担当講義科目は経済政策論Ⅰ・Ⅱ、環境政策論Ⅰ・Ⅱ。論専門分野は環境経済学、環境政策論。貿易や直接投資による環境問題への影響について研究している。
<http://www1.tcu.ac.jp/home1/hayashi/>



KEITA ARAI

経済学部助教授。
大阪府出身。Ph.D.（大阪大学）。2001年より現職。担当講義科目は計量経済学と規制の経済学。主要な研究領域は公共交通部門における生産性分析と社会資本投資の効率性分析。また離島地域における経済分析にも取り組んでいる。
<http://www1.tcu.ac.jp/home1/arai/index.htm>



MASASHIRO NAKANO

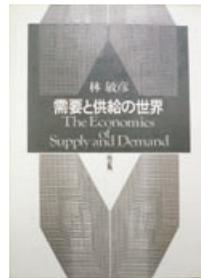
経済学部助教授。
1969年生まれ。熊本県出身。2000年神戸商科大学経済学研究科博士後期課程修了。主要な研究テーマは経済変動の分析。とくに設備投資変動と貨幣・金融市場のつながりを中心に研究している。
<http://www1.tcu.ac.jp/home1/mnakano/index.html>



牛嶋正・林敏彦
『現代経済学の基礎(1) マクロ経済学』
有斐閣双書(1993年)
価格(税込) 1,785円

賀川昭夫・辻正次
『現代経済学の基礎(2) ミクロ経済学』
有斐閣双書(1997年)
価格(税込) 1,785円

林敏彦『需要と供給の世界』はマーケットという存在を非常にわかりやすい表現で理解させてくれる名著です。経済の世界は市場メカニズムの理解抜きには語れません。その意味では1年生のうちに読んでおいて頂きたい1冊です。また、『現代経済学の基礎(1)(2)』は、もともと忙しいビジネスマン向けに書かれた書籍であることから、気楽に読めるシリーズとなっています。マクロ経済学やミクロ経済学の基礎を知る上では読んでみて損はないと思います。



林敏彦著
『需要と供給の世界』
日本評論社(1989年)
価格(税込) 2,856円

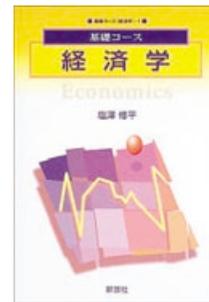


伊藤元重
『入門経済学 第2版』
日本評論社(2001年)
価格(税込) 3,150円

2冊とも入門書としてざっと目を通すにはかなり内容の濃い著書(欲張りすぎ？という声も)。価格もそれなりにするし、読破するにはかなりの時間と労力を要します。しかし本気でミクロ・マクロをやりたいなら、該当する講義のテキストや推薦書だけでなく、上記どちらか1冊を2年の夏休み辺りに頑張って精読してみてもどうでしょうか。



福岡正夫
『ゼミナール経済学入門 第3版』
日本経済新聞社(2000年)
価格(税込) 3,150円



塩沢修平
『基礎コース経済学』
新世社(2003年)
価格(税込) 2,100円

そもそも経済学ってなにをするの？という人は、まずこの本を読んで下さい。経済現象を理解するための基礎を解説しています。金融論や財政学、国際経済学、環境経済学などとの関連もわかります。



岩田規久男
『経済学を学ぶ(ちくま新書)』
筑摩書房(1994年)
価格(税込) 735円

経済学全般のイメージや目的、各分野、領域の構成などを理解するのに役立つ本です。安価で、サイズもコンパクトなので、入学後、5月の連休を利用して集中的に読んではどうでしょうか。

STEP 1 まずは「ざっと一気に」読んでみよう！

入門書を手に入れたら、まず細かい所は分からなくて良いから、ざっと一気に通して読んでみて下さい。細かい部分を気にすると「難しい・・・」と感じるでしょうが、それは当然なので気にしない方がよいです。経済学の対象、考察の目的、その方法について、大まかなイメージをつかむことは有益です。それをイメージしないまま、いきなり精読に励んで挫折する人は少なくありません。張り切りすぎて取り組むと、自力で理解できない箇所にぶつかった時の喪失感も大きいのです。まずはそれほど力まなくて良いから、集中的に一気に読んでしまうことです。



STEP 2 今度は「紙と鉛筆を使って」精読しよう！

もちろん、ざっと通読したからといって、「理論書を一通り読んだ」ことにはなりません。ミクロ経済学にせよ、マクロ経済学にせよ、テキストでは(最近かなり抑えられているとはいえ)多くの数式や図が用いられています。途中で断念した(もしくはやる気すら起きなかった)統計学の基礎理論も、計量経済学のテキストや最近のミクロ・マクロ中級テキストには登場します。これらは決して、楽にマスターできる内容ではないかもしれません。

今度は、紙と鉛筆を使って、式や図を実際に書いてみながら、説明文を丁寧に読み進めて下さい。ここでは妥協しないように。式や図に慣れるまでには少し時間がかかるでしょうが、決してあきらめないことです。大切なことは、自分でゆっくり「書いてみる」こと、前後にある「文章と式や図の対応を理解する」ことです。そして、「数式や図を理解するのが難しい」という段階から一歩進んで、「数式や図を全部飛ばして文章だけ見るより、分かる所は確かに分かりやすいぞ」という感覚が得られれば、あなたは確かに経済学の門をくぐったのです。あとはこうした楽しみや喜びをできるだけ増やしていけば良いのです。



STEP 3 4 応用も大事。 でも基礎学習の繰り返しを忘れずに。

先に述べた学習プロセスは決して平坦な道のりではありません。いくら考えても理解が進まない概念や説明に出くわすことは少なくありません。自分なりに精一杯考えても分からない箇所にぶつかったら、今度は図書館その他を利用して、別の人が書いた基本書の説明も参考にしましょう。たまたまその箇所の表現の仕方があなたの理解とスムーズに結びつかなかったという不運は結構あるのです。友人や先輩、教員に相談するのも有効です。少し異なる角度から説明されると、とたんに「ナルホドそういうことか」と分かることが多いのです。言い換えれば、最初から最後まで自分に合った1冊の基本書と出会えるとは限らないのです。ところがこのちょっとした不運によって、その分野全般に嫌気がさすことも少なくないのです。これはもったいない話です。

ある程度基礎力がついたら、中級・上級向けのテキストや応用科目の専門書に進みましょう。基本的にはステップ1～3の手順にしたがえば良いのですが、その頃には自分の問題意識が固まり、また経験に基づいて自分に合う学習法が身に付けているかも知れません。自分の目的意識や方法を明確にして、納得できる学習を進めましょう。そして、たまには最初に手にとった入門書をまた読んでみて下さい。あらためて分かることの多さに驚く事でしょう。それは皆さんがしっかりと成長している証だと思えます。